

パーキンソン病理学療法ガイドライン

重要用語解説

パーキンソン病患者 (people with Parkinson's disease)

近年、「患者」の表現を避けることが世界的傾向となっているため、パーキンソン病ガイドラインではパーキンソン病患者でなく、パーキンソン病者を用いている。

運動症状 (motor symptoms)

運動症状は、パーキンソン病の診断前後にみられる症状といえる。静止時振戦(tremor)、無動(akinesia)、筋強剛(rigidity)、姿勢保持障害(loss of postural reflexes)は特徴的な主症状であり 4 徴といわれている。歩行障害(gait disturbance)、すくみ足(freezing of gait)、嚥下障害(dysphagia)、転倒(fall)などが含まれる。

非運動症状 (non-motor symptoms)

非運動症状とは、運動症状以外の症状についての総称を指す。運動症状の前に現れる非運動症状も多い。自律神経症状（便秘・頻尿、起立性低血圧など）、睡眠障害（睡眠行動障害、不眠や日中の眠気など）、嗅覚障害、精神症状（不安、アパシー、うつ病、幻覚、妄想など）、疲労、疼痛（下肢、肩関節、腹部など）、認知機能障害などが含まれる。

UPDRS (Unified Parkinson's Disease Rating Scale)

国際的評価スケールであり、Part I が精神機能・行動および気分（4 項目）、Part II が日常生活動作（13 項目）、Part III が運動機能（14 項目）、Part IV が治療の合併症（7 項目）の 4 パートからなり、Part I ～III は各項目を 0～4 点、Part IV は症状なしの 0 点とありの 1 点で評価する。点数が多いほど重症となり合計は 199 点となる。（142 文字）

SMD (Standardized Mean Difference)

標準化平均差のことであり、2 つの推定平均値の差を標準偏差の推定値で割ったもの。同一の連続変数を研究間で異なる尺度で測定している研究結果を統合するために使われる。

運動イメージ

運動イメージは、頭の中で運動を想像すること、もしくはさせることを意味する。運動をイメージすることで脳活動が起こることは明らかになっており、運動の企画や自動化に障害をもつパーキンソン病患者において、理学療法を行う上での一手段となる。認知障害を有する患者には適応されにくく、運動を正確にイメージできているかどうか判断することは難しい側面がある。

LSVT BIG®

言語療法の分野で行われてきた声量に焦点を当てた集中的発声訓練法である Lee Silverman Voice Training (LSVT®)を運動に対応させたもので大きな運動に焦点をあてたプログラムである。

太極拳 (Tai chi)

中国に伝わる古武術の一つである。套路（ろうと）、推手（すいしゅ）、散手（さんじゅ）で構成されるのが一般的であり、これを原型として様々な流派がある。近年運動としての利用価値が見出されている。

すくみ足

歩き始めや目標間際、狭い通路や方向転換時に、一歩がなかなか踏み出せなくなる現象で、PD 者の約 50% に出現すると報告されている。自身は歩こうとしているのに足が動かず進まないため、体が前のめりになってしまい転倒することもある。

キュー

動作の開始を促す合図・信号で、英語で「手掛かり」「合図」を意味する。理学療法場面では、すくみ足の減少や歩幅の改善を目的とした視覚キューや、歩行リズムの改善を目的とした聴覚キューなどが用いられる。代償的アプローチとして患者や家族指導に用いられたり、歩行や立ち上がり動作場面で利用されたりもする。

運動合併症

運動合併症とは、長期のドーパミン服薬によって生じ、ウェアリングオフ（wearing-off）やジスキネジア（peak-dose dyskinesia）を指す。ウェアリングオフとは 1 回の薬効時間が減衰してくる現象であり、ジスキネジアとは服薬後に舞踏病様の不随運動が現れる現象である。PD 者の QOL を高めるために、運動合併症の状況を把握する必要がある。

略語用語集

SMD	Standardized Mean Difference	標準化平均差
TUG	Timed Up and Go	
UPDRS	Unified Parkinson's Disease Rating Scale	統一パーキンソン病スケール